

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	西田 将哉
論 文 題 目	漱石初期小説の研究
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、夏目漱石の初期小説の位置づけを明らかにするとともに、その語りや表現の位相を詳しく読み解いたものである。すなわち、漱石の創作活動は、明治三十八年(一九〇五)の『吾輩は猫である』から大正五年(一九一六)の『明暗』まで、通算十二年に渡っているが、この活動期間を、初期・中期・後期と区分することが一般的に行われている。しかし、その基準は必ずしも明確ではなく、漱石の実生活上の変化を拠り所とするものや、一人称小説から三人称小説への形式的変化を拠り所とするもの、また『三四郎』『それから』『門』のいわゆる三部作以降を中期と位置づけるものなど、実際には論者の立場によって見解が分かれているのが実状である。そうしたなかで申請者は、語り手の変遷、語り手が登場人物に冠する敬称とその効果、そして語り手が作り出す作中の空白という三つの観点から漱石の小説を精査し、明治三十八年(一九〇五)の『吾輩は猫である』から明治四十一年(一九〇八)の『三四郎』までを初期小説として位置づけて、その表現の特色を詳しく分析しており、従来の漱石論を踏まえながら新たな知見を提出し得たものと評価することができる。本論文は、二部構成で全十章、および序章、終章、主要参考文献から成るが、以下に各章の概要と達成点を示す。</p> <p>第一部「一人称小説の展開」では、『吾輩は猫である』に始まる一人称小説を考察の対象としているが、まず第一章「空虚な書斎——『吾輩は猫である』——」では、主人である珍野苦沙弥の書斎が、自らをインテリや知識人として演出する空間であったことを指摘し、「吾輩」はその空虚な空間に盤踞する苦沙弥を揶揄しながら、一方では共感をもって語っており、そのことを示すのが「吾輩」による登場人物への敬称付けであることを指摘した。また第二章「語り手「余」の友情と恋——『趣味の遺伝』——」では、「余」という一人称を用いる語り手の、日露戦争で戦死した友人への友情を枠組みとして理解されてきたこの小説から、友情の物語を相対化する別の物語を抽出することを試みている。とくに、「女」から「御嬢さん」への呼称の変化に着目し、「余」と女とが作中において結ばれているとする新たな説が提示されていることに注目したい。</p> <p>続く第三章「渾名のゆくえ——『坊っちゃん』①——」、第四章「渾名が生みだす〈漱石神話〉——『坊っちゃん』②——」は、いずれも『坊っちゃん』を対象としたもので、第三章においては、語り手「おれ」のつけた渾名がどのようにして発生し、誰と共有され、どのように機能するかを詳しく検証し、渾名だけの人物が一貫して揶揄の対象とされているのに対して、本名でも呼ばれる人物は語り手が共感ないし同情を示す人物であること、また『坊っちゃん』の読者は、登場人物とは異なる位相で「おれ」と渾名を共有する相手となることが、丁寧に論じられている。それを踏まえて第四章においては、漱石の没後から、その周辺人物による作中人物のモデル詮議が行われてきたことの経緯や意味を振り返るとともに、漱石や『坊っちゃん』と関わりをもち、自らを特権的な読者と自任する人々の『坊っちゃん』解釈の優位性をめぐる闘争の構図を明らかにし、小説受容の変遷を手がかりとして、いわゆる〈漱石神話〉形成の過程を明らかにすることを試みている。そして第五章「表層としての「非人情」・深層としての「人情」——『草枕』——」においては、「余」の「非人情」と「人情」の葛藤、「余」の語る小説観、また「那美さん」という敬称付けの意味するところについて論じ、従来の理解を一步進めようと試みている。</p> <p>続く第二部「初期小説における「作者」の登場と消失」では、漱石における一人称小説から三人称小説への転換がどのようになされたのかを、「作者」を自称する語り手の登場から消失までを追うことで明らかにしようとする。このうち第六章「「一人坊っちゃん」ということ——『野分』——」では、「作者」を名乗る語り手と、語り手が登場人物に冠する「先生」や「君」といった敬称を分析することを通して、従来この小説が「教育」の物語として読まれてきた構造を明らかにするとともに、実際には「一人坊っちゃん」の孤独から逃れようとする中でいっそう孤独が際立つことになるという意味で、孤独についての逆説を描いた小説であると論じている。続く第七章「「作者」と藤尾の死——『虞美人草』——」では、ヒロインの甲野藤尾の死を再検討する試みとして、彼女が死ぬ十八章と十九</p>	

氏名 西田 将哉

章の間の空白を問題とし、小説における空白、「作者」という語り手、そして「作者」から敬称を付けて語られる登場人物という三者の関わりを、小説の表現に即して詳しく考察した。第八章「小説」と「事実」——『坑夫』——においては、『虞美人草』と『三四郎』の間に書かれた一人称小説『坑夫』を論じ、『坑夫』が同時代の報道や探訪記などの「事実」についての言説を巧みに取り入れながら、自らの「事実」性を確保した「小説」として成立していることを指摘した。そして第九章「生きて居るとしか思へぬ」主人公——『三四郎』——では、これまで十分に検討されてこなかった、『三四郎』をめぐる田山花袋との論争を発掘し、三四郎と語り手の視点を曖昧にする登場人物の敬称とその変化が、この時期の漱石の方法的所産であったことが明確に論じられている。本論の最後にあたる第十章「漱石文学における「作者」の消失とその後——いわゆる前期三部作を中心に——」は、これまでの視点に立って、いわゆる三部作と称されている『三四郎』と『それから』『門』の間に、小説表現における明確な相違が見られることを指摘し、『吾輩は猫である』から『三四郎』までを初期小説と位置づける本論文の妥当性が確認されている。

これらを通して、本論文においては、語る人称、登場人物への敬称付け、作中の空白等、これまで漱石の初期の特色として個々には指摘されていたものの、一体として論じられることのなかった諸要素を、密接に関連するものとして読解することを通して、これまで作家論的な枠組みなどから比較的曖昧に用いられてきた「初期小説」という区分を、小説自体の表現を通して明確に提示し得た点に大きな特色がある。各章ごとにそれぞれの小説表現の特色と意味が丁寧に論じられており、極めて蓄積の多い漱石研究の従来成果を踏まえながら、篤実にその理解を一步前進させたものとして評価できる。

公開審査では、こうした点が評価されるとともに、一方において、漱石の「初期小説」のうち、本論文では論じられていない初期の短編群、——たとえば『一夜』のように「余」という語り手が選択されていない小説がとりあげられていないことが指摘された。また、申請者が援用しているジュネット解釈の曖昧さや、申請者の指摘する小説の「空白」という問題が、一人称から三人称への人称の展開とどのように必然的に結びつくのかといった点に関する更なる考察の必要性が指摘された。さらに、申請者の用いる「表現論的」という用法が、語り手の主観の表出に関わるのか、小説を組み立てるモチーフすべてに及ぶのかといった点や、『坑夫』や『三四郎』をめぐる田山花袋との論争などにおいて、同時代の自然主義とのかかわりを視野に入れる必要があるのではないかとといった点などが、本論の枠組みに関わる大きな問題として指摘された。とくに、小説における人称や待遇表現を論じるにあたって、近年の日本語学の成果が十分に摂取されていない点は、本論文の最も大きな課題の一つになるだろう。しかし、これらは本論文の欠点というよりも、今後著書としてより効果的に成果を提示するために検討が求められる課題というべきものであり、むしろこれらの課題を踏まえて、今後の研究をさらに発展させていくことが期待される。

以上のように、本論文は、丁寧な読解を通して、漱石の小説における表現や語りの位相を詳しく分析し、「初期小説」の位置づけを明らかにすることで、新たな小説読解の可能性を提示し、従来の漱石研究を一步前進させた優れた成果であると判断される。従って審査委員会は、全員一致で、本請求論文が「博士(文学)」の学位授与に値するものと認定する。

公開審査会開催日	2018年 10月 1日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	宗像 和重	日本近現代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高橋 敏夫	日本近現代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	十重田 裕一	日本近現代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鳥羽 耕史	日本近現代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学教育・総合科学学術院・教授	石原 千秋	日本近現代文学	

